

# 伊野川から忠別川までの地名③〇

## 忠別川のアイヌ語名(下)

前回まで、忠別川のアイヌ語が二説あることを紹介した。一つは、チウペツ (ciw-pet 波・川)―波立つ川↓ (急流川の意味である。このチウペツの音から「忠別川」の漢字表記が確定した。もう一つは、チユクペツ (cuk-pet 太陽、日・川)―「日の昇る川」。

この「日の昇る川」を意識して、「旭川」という自治体名が誕生したのである。

昭和五十九年に、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『北海道の地名』で、右の二説を紹介した上で、チユクペツ (cuk-pet 秋・川) 説を提唱された。すなわち、忠別川は秋になると、チユクチェブ (cuk-cep 秋の・魚↓鮭) が盛んに上る川なので、チユクペツ (cuk-pet

秋・川)と命名されたといっているのである。

山田秀三は、旧記・旧図から、羽幌町の築別川、釧路市と浦幌町の境界の川の直別川も、同じチユクペツ (cuk-pet 秋・川) 由来の川であるとしている。筆者も現地を訪ねて、両河川とも鮭の盛んに上る川であることを確認した。

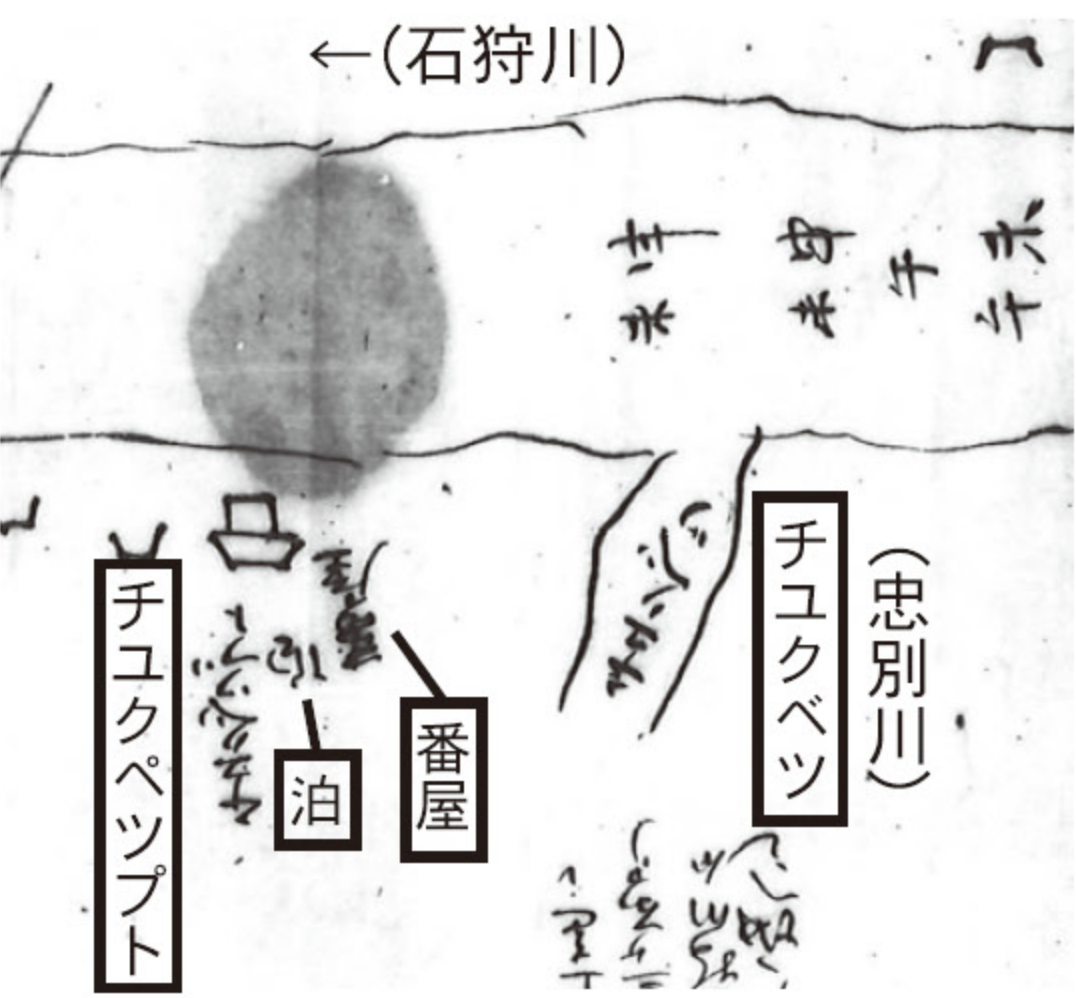
アイヌ語が分かり、幕末に旭川を訪れた近藤重蔵、間宮林蔵、松浦武四郎の三人は、忠別川のアイヌ語名を「チユクベツ」と表記している。すなわち、忠別川のアイヌ語名を、山田秀三が指摘した通り、チユクペツ (cuk-pet 秋・川) としているのである。

文化四年(一八〇七年)に、天塩川から石狩川筋に山越えしてきた近藤重蔵は、ビヰ (比布) の番屋で一泊し、翌日石狩川を下り、忠別川の合流

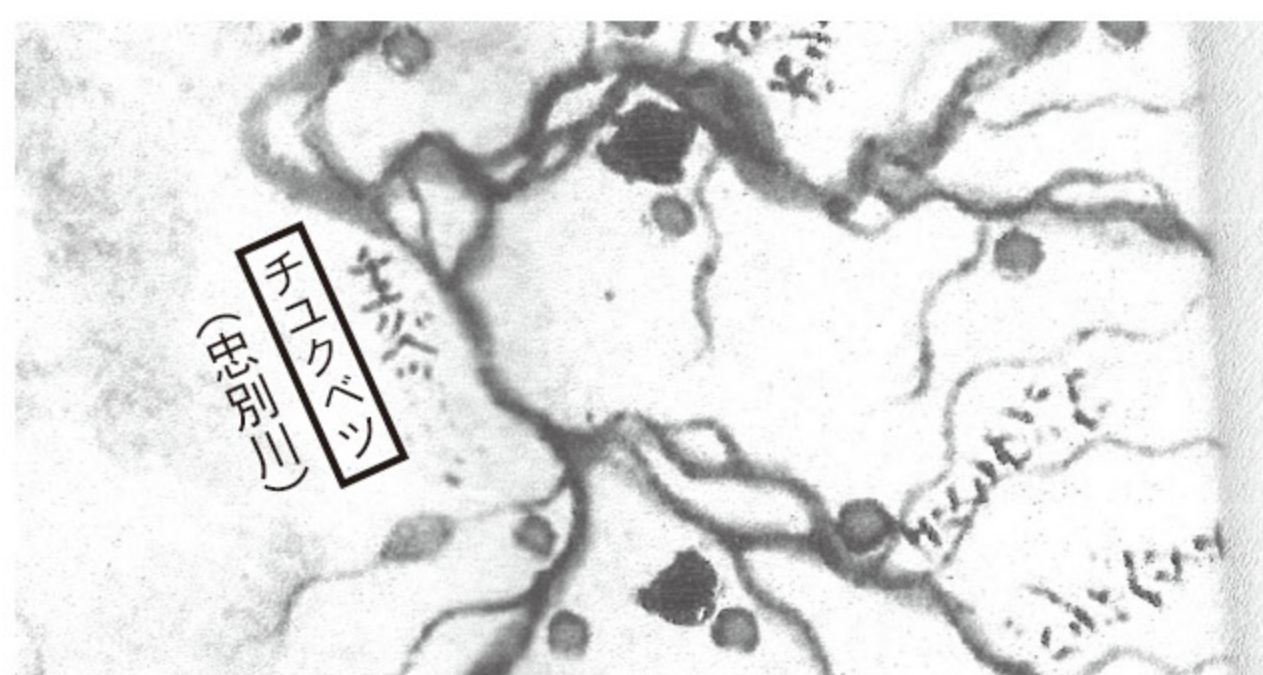
# 断章 旭川のアイヌ語地名研究

141

高橋 基



写真① 近藤重蔵「石狩川筋図」



写真② 間宮林蔵「実測蝦夷図」

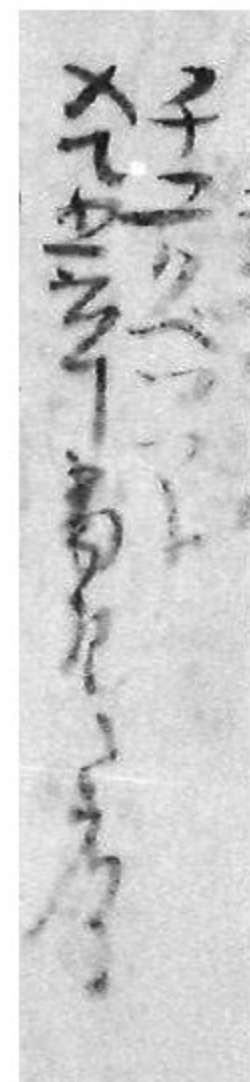
点の下流にあった番屋でも宿泊する。番屋とは、アイヌと和人が交易する家屋である。

写真①は、近藤重蔵の野帳 (フィールドノート) である、「石狩川筋図」の忠別川合流点下流の番屋の図である。忠別川は、「チユクベツ」の表記で、そこに記載されたメモには、「此川上遠シ 番ヤ三ヶ所アリ 此川上ヨリトカチへ越ヘシ」と記載されている。

次に紹介する間宮林蔵の文化十四年(一八一七年)作成の(仮称)実測蝦夷図(国立公文書館所蔵図)には、写真②のように、忠別川は、「チユクベツ」と表記している。この地図には、番屋(■印)が忠別川に二カ所、石狩川に二カ所記載されている。

近藤重蔵が旭川を訪れてから五十年後の安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が旭川の番屋に宿泊する。その番屋は、忠別川が石狩川と合流する地点から五丁上流の忠別川左岸にあ

写真③ 松浦武四郎「已第二番」



った。写真③は、松浦武四郎がその番屋に到着した時の野帳の当該部分で、「チユクベツフト入て五六丁 番屋に宿る」と記している。忠別川は、「チユクベツ」の表記である。このように、アイヌ語を理解してい

て、実際に旭川を踏査した、近藤重蔵、間宮林蔵、松浦武四郎が、忠別川のアイヌ語名を「チユクベツ」と表記している、その信頼度は非常に高いといえる。

昭和時代では、クーチンコロの孫の門野ナンケアイヌが、自分と同じ方言を話す人としてあげた石山アツムヤシクの子の石山長次郎(明治三十五年生まれ)が、石狩川と忠別川の合流点を、松浦武四郎と同じく、ツクペツ

トウ (cuk-pet-putu 忠別川が石狩川と交わる所)【昭和五十七年度、アイヌ民族調査Ⅱ】と発音している。幕末からの忠別川のアイヌ語名のチユクペツ (cuk-pet 秋・川) が、現代にも残っていることが証明され、感慨深い。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します